

## 2018年度日本霊長類学会高島賞選考結果報告

本年度の高島賞への5名の応募を受け、2018年5月21日に、名古屋会議室・新名古屋高架新幹線口店にて、高島賞選考委員会を開催した。選考委員6名が出席し、中川尚史庶務担当理事の陪席のもと、応募者の対象となる業績を、学会の規定、従来の基準等に照らし合わせて審議した。対象者は全員、優れた業績を上げており、審議は長時間に及んだ。活発かつ慎重な議論の末、勝野吏子氏と山梨裕美氏を受賞者として推薦するとの結論に至り、これを理事会に答申することとした。

勝氏の推薦理由は以下のとおりである。

### 【勝野吏子氏の推薦理由】

対象著作

1. Katsu N, Yamada K, Nakamichi M. (2016) Function of grunts, girneys and coo calls of Japanese macaques (*Macaca fuscata*) in relation to call usage, age and dominance relationships. **Behaviour** 153: 125-142. doi: 10.1163/1568539X-00003330
2. Katsu N, Yamada K, Nakamichi M. (2017) Influence of social interactions with nonmother females on the development of call usage in Japanese macaques. **Animal Behaviour** 123: 267-276. doi: 10.1016/j.anbehav.2016.11.009
3. Katsu N, Yamada K, Nakamichi M. (2017) Vocalizations during post-conflict affiliations from victims toward aggressors based on uncertainty in Japanese macaques. **PLoS ONE**: 12: e0178655. doi: 10.1371/journal.pone.0178655
4. Katsu N, Yamada K, Nakamichi M. (2017) Functions of post-conflict affiliation with a bystander differ between aggressors and victims in Japanese macaques. **Ethology** 124: 94-104. doi: 10.1111/eth.12707

勝氏はこれまでに、ニホンザルを対象として、社会行動の領域の研究を行っている。近年は音声コミュニケーションの研究に力を入れており、対象となった論文4件は、いずれもその研究の成果の報告である。

論文1の具体的なテーマは、近距離音声の情報と機能である。ニホンザルのオトナメスを対象にして調べ、相手と鳴き交わした場合や、異なる音声を組み合わせて発した場合には、親和的交渉がより起こりやすいことを示した。また、優位個体がどの種類の音声を発しても親和的交渉が生じるのに対し、劣位個体では音声の種類に依存することを、明らかにした。ニホンザルが、音声と状況を統合的に認知していること具体例を、示したことになる。

論文2は、近距離音声の用い方の発達を扱っている。近距離音声は相手に敵意がないことを伝達する機能があり、成体では、とくに非血縁個体と関わる際に頻繁に近距離音声を用いる。0歳齢から成体までのニホンザルメスを3年間にわたり観察し、音声の用い方の習得が、他のメスと関わった経験により促進されることを示した。

論文3と4では、ケンカ後の場面のコミュニケーションについて調べた。近距離音声を用いた仲直りは、接触を伴う仲直りに比べて、普段は関わりの少ない個体間で起こりやすいことを示した。また、ケンカの後にとる行動として、仲直りの他に、ケンカに関わっていない第三者と親和的交渉を行うことに、注目した。そしてこの行動が、さらなる攻撃を受けにくくするのに有効であることを、示した。以上から、ニホンザルは攻撃を受けるリスクや、ケンカを行った相手と関係を修復する利益に応じて、仲直りの際にとる行動や、第三者との交渉を選択していると、推測した。

以上の4件の論文はいずれも、評価の高い学術誌での公表となっている。4件のそれぞれが、論旨として完結しており、着実に成果を積み上げている。そしてその成果から、ニホンザルで社会関係を調整するコミュニケーションの実態を、これまでより正確に把握できるようになった。これは、ニホンザルに限らず、個体間のコミュニケーション、さらには社会行動の分野の研究者にとって、大きな貢献であるといえる。

高島賞選考委員会  
委員長